
いぬたま

よしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いぬたま

【Nコード】
N9604B

【作者名】
よしき

【あらすじ】
俺、相田良治。毎日何故か不幸です。神様の悪戯の所為で「犬男」にされてしまい…。俺のそんな毎日の話、聞きたい？

1・はじまり 犬男爆誕！（前書き）

初の書き下ろし連載です。

無軌道でどこまで続くか分かりませんが、よろしく願います。

1・はじまり 犬男爆誕！

俺、相田良治（17才）は星に祈っていた。

高校男子のクセにそんな乙女チックでロマンチックな事をしている。

それには理由がある。

長年一緒に過ごした愛犬が、先日死んでしまったのだ。

たかが愛犬の事で、などと笑う事なかれ。

大事な、大事な家族だったのだ。

いわば、クレンしんちゃんのシロ、フラン　ースの犬のパトラッシュ、ドラゴン　ールのクリリン。

な、どれもいなくなったらみんなだって悲しいだろ！

俺にとってはそれほど大事な愛犬だったのだ。

愛犬の名前はカルディナ。

車の下で拾った雑種だったけど、そんな事は関係ない。

いなくなつて気が付く事もある。

カルディナは本当に大事な家族だったのだ。

だから真剣に祈っている。

「神様、お願いです。カルディナを蘇らせてくれ。…いやひと目会っただけでも良い。頼む…。頼む！」

その時、星がキラリと光った。

原因は某大国の打ち上げた大陸弾道ミサイルがキラー衛星の攻撃により打ち落とされたのだが、ここは神様の奇跡に星が応えた、としておいてくれ。

世界のどこかで戦争をやっている事など関係ない。

今この話で大事なのはカルディナの事だからだ。

星の光に呼応するように、夜空から一筋の光が射してくる。

驚いて顔をあげる。

「…ま、まさか…マジで…」

光の中に着物姿の威厳ある姿が立っている。

バックには荘厳な音楽まで聞こえてきそうだ。

神様（らしき人）は静かに頷く。

「よろしい。そなたの願い聞き届けた。」

ありがたいお言葉に良治は手を合わせ涙した。

「まったく、男がメソメソしやがって、辛気臭い野郎だな…。」

「！…あれ？？さっきの威厳ある神様は…？？」

「ああ…、細かい事をウジウジと、五月蠅い奴だ。」

「い、いや…でも…。」

「さっきのも俺だよ。文句あるか？」

今、目の前にいるのは着物を着崩した粗暴そうな男が一人。

ダルそうに髪をかきあげながら欠伸までしている。

一言で言つと江戸時代の遊び人に悪そうなヤンキーを足した感じ。

とても神様の類には見えない…。

「で、願いだろ。いいよ、叶えてやるから、ちょっと待ってるよ。」

「…えっ…ええっ!?!」

男が何事かブツブツ呟きながらお札を1枚差し出す。

「…の御霊を呼び覚ます…>天青<の名において命じる、応えよ<カルディナ<!」

ポンツとお札が弾け、目の前に煙が漂う。

「ゲホツ…な、何を…。」

「さあ、お前の願いを叶えてやったぞ。」

「はっ?」

やつの事で煙が消えた部屋の中を見回しても、カルディナの姿は見えない。

「ど、どこにいるんだよ…。」

「はあ…よく見てみろって。」

下を見下ろす。

なにやら後ろでパタパタとシッポを振る音が聞こえる。

後ろにいるのか?

が、振り返っても何もいない。

「じれったいなあ…ほら。」

神様は鏡を差し出す。

見ると鏡の中の頭の上で耳がピコピコ。

お尻の部分ではシツポがパタパタ。

「うむ、良く似合っているな。」

神様（らしき人）はニヤツと笑う。

「なっ…なんじゃこりやああ…!!!!」

犬耳…それにシツポまで…。

お…俺、犬男になっちまったよ!!

1・はじまり 犬男爆誕！（後書き）

「いぬたま」のはじまりです。

携帯で見やすいようにと短めに書いていたのですが、どうやら短すぎたようです。

1話と2話を合体させました。

1度お読みになった方にはお詫びを申し上げさせていただきます。

今後はこのような事が無いよう気をつけます。

2・ヒバリ登場！

「何なんだよ！これは？！」

「だから、カルディナを蘇らせてやったんだが…。」

「誰が>犬男<にしてくれって言った！！！」

「だってお前カルディナを火葬しちゃっただろ。」

「…そうだけど。」

「入れ物が無ければ蘇れないんだから、仕方なくお前の中に入れてみたんだが。」

「入れてみたんだが、って…。」

「いやゝ、結構成功するもんだな。俺もビックリしたよ。」

ケラケラと笑ってやる。

「戻せ！今すぐ元に戻してくれ。」

「無理。」

却下、といった具合に手をヒラヒラと振る。

「ちょっと待てよ、だいたい」

「てんせいさまあゝー！！」

詰め寄ろうとした瞬間、甲高い女の声がそれを遮る。

「やっと見つけましたよ！天青様！何寄り道してるんですか！！」

「おお、ヒバリ。いや、ちょっと暇つぶしに…。」

「もう次の仕事の時間なんですよ！まったく、すぐ仕事サボってそうやってフラフラしてるから私が毎回苦労するハメに…。」

突然現われた小学生のような女の子は母親のようにブチブチと文句を言い始めるが、天青のほうはまったく気にしていない様子だ。

と、天青は何か閃いたように手を叩く。

天青は女の子のヒバリの肩に両手を乗せ顔を覗き込む。

「ヒバリ、大事な頼みがある。」

「…はあ、なんでしょうか…。」

ヒバリはなんとなく嫌そうな顔をして目をそらす。

「俺は次の仕事に行く。でだ、しばらくコイツの面倒見てやってくれ。」

と俺を指差す。

「なに、しばらくの間だけだ。すぐに迎えに来る。それまで彼の傍

で色々と助けてやってくれ。」

「ちょっと、天青様?!」

文句を言いかけたヒバリを無視して、俺にも一言。

「そのうちヒマが出来たら戻してやるからよ。それまでカルディナと楽しく過ごせよ!」

天青は>アディオス<とか言いそうな感じで手を上げて空へ飛んでいってしまう。

「天青さまぁー!!」

ヒバリの叫びが虚しく夜空に響く。

俺はただ呆然とするしかなかった。

もう、何がなんだか、だよ…。

犬男になっちまうわ、ヒバリは窓にすがりついてガックリしてるし。

と、突然ヒバリが握り締めた拳を突き上げる。

「…そうよ、発想の転換が大事なのよ!」

「…??」

「あのいい加減男の世話から解放された…いわば、これは私に与えられたバカンスなのよ!ラッキーだと思わなきゃ!」

ヒバリは窓枠に足をかけ、それは見事なガッツポーズで頷く。

と、突然良治のほうへ向き直る。

「って事でよろしく願いしますね。ちゃんとよろしくされちゃいましたから。」

と、ニツコリ。

「お願いしますねって…まさかここに住むわけじゃないよな…?」

「ダメなんですか?」

ヒバリは、何言っちゃってんのこの人的な発言。

「いや、ダメも何も、いきなり家に転がり込まれても…。」

「じゃあ、私にここを出て行ってホームレスになれ、と?」

「いや…そうゆうわけじゃ…。」

「ひどい！優しい人だと思っていたのに！こんな小さな女の子を追出すなんて、鬼よ！悪魔だわ！！天青様の尻拭いとはいえ、困った事態になった良治様の為に私…一所懸命頑張ろうと……。」

叫ぶなりワーっと大声で泣き始めてしまう。

「ちよっ、待て待て！別に追い出そうなんて全然…。」

「じゃ、ここに置いてくれるんですね。」

ガバツと顔を上げて詰め寄られる。

「…いや…それは…」

涙溢れる顔で必死に助けを求める小さな女の子…。

見捨てたら、やっぱり俺酷い人？

勢いに負けた良治は不承不承ながら小さく頷く。

「はい…どうぞ。」

途端にヒバリの顔に満面の笑みがこぼれる。

「良かったあ。お願いしますね、良治様くはあと」

可愛い笑顔に良治はちよつと照れてしまう。

しかし良治は気が付いていないが、ヒバリの手には目薬が握られてたりする。

知らぬが仏。

ダメ神様の下で苦勞してきたヒバリの処世術なのだ。

3・変態犬男

「ようするに、天青様は動物専門の神様で、私はそのお手伝いをしているんですよ。」

「はあ、動物専門…ねえ。」

「だから良治様みたいに人間相手に力を使えないはずなんですけど…。」

「つまり動物の医者に改造手術をされた、みたいなもんか？」

「ま、そんな感じですね。だから専門外なのでパツと直すわけにはいかないんですよ。あのダメ男の巻き添えを喰らった良治様には災難かと思いますが。」

当然「思いますが」の後には「諦めて下さいね。」という言葉がくるのだが。

「で、直る見込みはあるのか？」

「…さあ？」

「さあ？じゃねーだろ！なんか方法が。」

「人間専門の神様なら出来ますけど、あの人たちって…つまりエリートって奴？動物専門神なんて相手にしてくれないんですよ。だから

ら多分頼んでも無理かと…。」

「いや、でも天青はそのうち治してやるとかなんとか…。」

「ああ、いつものでまかせですよ。見栄っ張りで言っただけですつて。」

…俺一生犬男のままかよ…。

ヤバい、マジ落ち込んできた…。

「あ…でも良治様、安心なさって下さい。」

おつ、何か解決策でも…。

ヒバリは満面の笑みで、自身満々に言い放った。

「その耳とシツポ、良治様にとおおつてもお似合いですよ>はあ
と<」

「こんなもん似合って嬉しいわけねーだろっ！…！」

「ちえー、残念。褒め殺しが通用しないなんて…。」

褒めてねえだろ…！！

「ちなみに私は見習いなので、何の力もないし術も使えませんのであしからず。」

…コノ役立たず…。

俺はこの状況を親にどう説明するか悩んでいた。

正直に打ち明けるってのもなあ…。

それ以上にほかの言い訳も思い付かないし。

と、悩む俺の後ろではヒバリが一人で遊んでいる。

いや。正確には俺の耳がピコピコ動くのが面白くて、ツンツンしたりして俺で遊んでいる。

…まったく…。

と、突然ドアが激しくノックされる。

そして耳とシッポを隠すひまなどないうちにドアが勢いよく開けら

れてしまう。

「おじゃま。良治、どう？元氣して…。」

侵入者の顔が見る見る変わってゆく。

まるで…というか、本物の変態を見つめるような冷たい視線。

入ってきたのは本田薫。

幼馴染で同級生で…その…なんてゆうか…アレだよアレっ！

お、俺の好きなひと…うわあ、こっ恥ずかしい。

長い黒髪、切れ長な目、細いくせに出るとこ出てるスタイルの良さ。

典型的日本美人タイプだ。

もう、こんな幼馴染最高だよな。

ま、ぶつちゃけ俺の片思いなのだが…。

…。

ちょっと待て！！

今の状況を整理してみよう。

・落ち込んでいるであろう17歳の健全な男子高校生の部屋へ遊びに来た幼馴染の女の子。

・と、そこには犬耳＆シツポのコスプレ男。

・そして、それにじゃれるように寄り添う小学校低学年くらいの幼女。

そこから導き出される答えとは…。

薫の顔が見る見る変わってゆく。

まるで…というか、本物の変態を見つめるような冷たい視線。

「な…何やってんのよ?!」

やっぱり…。

「落ち込んでるんじゃないかと思って様子見に来てみたけど…。」

「あのさ…薫、これには色々と訳が」

薫は冷静な顔を作りながら、冷たく言い放った。

「…変態コスプレロリペド男…」

「ちよっ…待て待て!話くらい聞いてくれ!!」

背を向けた薫に追いつがるように手を伸ばす。

と、ほのかに爽やかな香りが鼻腔に届いた。

ーダイスキナニオイー

俺の中で誰かがそう言う。

途端、俺の体は薫に向かって突進していった。

「なっ！…何やってんのよ！…」

「いや、俺の意思じゃ…ないんだけど…」

俺の体は意思とは裏腹に薫にじやれるように飛びついてしまったのだ。

「良治…止めて！！あつ、変なところ触らないで…！」

「違う…体が勝手に…。」

もう俺の体は止まらなかった。

犬のように薫の足や腰にすがりつき、嬉しそうにクンクンしてしまふ。

まったく俺の意思とは関係なく…。

…いや、ちょっと嬉しいハプニングとか思ったりして…。

突然。

バチーン！！！！

薫の張り手が思いつきり横っ面に入る。

「良治のバカ！！！」

叫びながら飛び出していつてしまった。

ヤバイ…薫…泣いてたかも…。

俺はうなだれ、耳もシッポもシュンとなってしまう。

「わ、わあ、修羅場ですね、修羅場！ドラマみたいです。」

無邪気に笑っているチビッコ。

終わった…絶対嫌われた…。

ダメだ…もう立ち直れねえ…。

俺の人生…終わった…。

4・新たな災難？

「あら、良治様。まだ泣いてるんですか？しょうがない人ですね。」
ヒバリが腕組しながらヤレヤレと呟く。

片思いの幼馴染に痴漢行為（俺の意思に反しての行為だと強く訴えるが）を働いてキラわれ、その上で元気百倍な奴がいたらお目にかかってみたいもんだ。

「まあ、まあ。仕方ないですよ。嬉しくてカルディナがちょっとはしゃいじやっただけじゃないですか。」

ポンポン、と俺の頭を撫でてニッコリと笑う。

ちょっとはしゃいだって…。

ちよつとさっきの事を反芻してみる。

「俺（精神はカルディナ）、薫の体を触りまくり。」

薫「良治のバカ！！」しかも涙目。

薫、逃げるように走って退場。」

まんま変態じゃねえかよ！

「お触り大好き変態痴漢ボーイ」決定じゃないか！！

あーダメだ。マジ落ち込んできた。

ヒバリはもう一回ヤレヤレと溜め息をつくど、思い出したように言う。

「そうそう、良治様のお母様にタゴハンだから呼んできて欲しいと言われてました。」

「…あ、そう。タゴハンか…。」

「はい、冷めないうちに頂きましょうよ。」

…。

「ちょっと待て！お前ウチの親と何話してんだよ！！」

ヒバリを居候させる事をまだ何も言っていないのだ。

犬耳シッポ付きになった上に、これ以上誤魔化しような無い出来事だっというのに。

「何を？つて…」ご挨拶して、良治様の事をお話して…。」

「俺の事だと？」

「はい、随分可愛らしい姿になりましたよ、と。」

「言ったのか…。」

「はい。ありのままを。包み隠さず。」

ヒバリは、素直な正直者の私を褒めて下さい、みたいな顔をしている。

…。

これっぽっちも言い訳するひまも無く。

犬男になってしまい。

幼女と居候する事に。

変態コスプレロリペド男、なんて言葉が頭をよぎる。

ああ…もう家族にも見放されたかもしれねえ…。

さらに落ち込む俺にヒバリはニッコリと微笑む。

「良治様、大丈夫ですよ。」

「大丈夫って…なにが？」

「…ま、とにかく大丈夫ですから。」

怪しげな笑みを浮かべるヒバリの手招きに誘われて、仕方なく食卓へ向かった。

「いや、そうですね。神様も大変ですな。」

「お父さん、お供え用のオハギをお出ししたほうが良いかしら？」

「おお、母さんが利くね。どうです？オハギはお嫌いですか？」

「とんでもない、大好物だよ。」

「そりゃ良かった！母さん、早くお出しして！」

「はいはい。」

食卓の場はメチャメチャ明るかった。

酔っ払って機嫌のいい父さんと、つられて笑っている母さん。

父さんにビールを注いでもらっているのは天青だ。

「えっと...どーゆー事??」

「天青様の術で、今回の出来事を納得してもらってるんです。」

ヒバリは得意げに説明する。

「ま、簡単な術ですし、元々この辺りの人は迷信深いので問題ないんですよ。」

「なるほどね…。」

肩の荷が下りてホッと溜め息をつく。

…いや、下りてない！

この姿が一番の問題じゃないか！

天青はそんな俺に気が付くとヒラヒラと手を振る。

「おお良治！ゴハン冷めちまうぞ。」

「いや、その前にこの姿をなんとか」

「似合ってるからいいじゃねえかよ。ねえお父さん？」

「まったくもってそうですね。折角神様がして下さったんだ。ありがたじゃないか。なあ、母さん？」

「ええ、そうよね。」

3人そろってニコニコと褒め称える。

…ありがたくなえ、つつの！

天青は俺をチヨイチヨイと呼び寄せる。

「なんだよ？」

「お前に良い物をやるよ。」

と小声で言うと、小さな小壘を手渡す。

「元に戻る薬か？」

「いや。それより良い物だ。」

「???」

「惚れ薬。ま、お詫びのしるしだと思つとけ。」

つて、何か買収されてるような気がするが…。

いや、待てよ。

コレを薫に使えば…うひひひ…。

もしかして、もしかするかもしれない！

逆転ホームラン間違い無しじゃねえかよ！！！！

「ヒバリには内緒だぞ。」

意味が分かんが、取り合えずOKサインで答えとく。

「ま、そんな訳でこいつらの面倒頼んだぜ、良治!」

いささか不本意とはいえ、色々と手を回してもらってるんだ。

ヒバリの面倒くらいなんとか…。

…こいつら??

テーブルを見回すとテーブルの向こう側でヒバリがから揚げと格闘している。

さらにその横に茶パツで髪の長い女の子がモソモソとゴハンを食べている。

さらに、さらにその横では手づかみで魚を食べている短髪赤毛の女の子までいるじゃないか。

「ちよっ…、ええ…?!?!」

「おう、紹介しとくな。おいサラ。」

髪の長い女の子が顔を上げる。

見たところ14、5歳といったところだろうか。

キリッとした和服が良く似合っている。

「あの、その節はお世話になりました。サラで御座います。」

「その節?？」

「お前が昔助けたんだとよ。」

「おじいちゃんここで良治がキツネの子供を拾ってきた事があった
だろ。」

その父さんの言葉に、ぼんやりと思い出してくる。

「そつか。あの時のキツネか。」

「はい。見習として召し上げられる前に、良治様に御礼を申し上げ
たいと天青様をお願いしまして、こちらへ参りました。」

サラは深々と頭を下げる。

俺も何となくつられて頭を下げてしまう。

凄くおしとやかで礼儀正しいじゃないか。

「さて、でもう一人がアイだ。」

呼ばれた赤毛の女の子は口から魚の尻尾を垂らしながら振り返る。

見た目はヒバリと同じくらいの10才前後のチビッコなのだが。

食べ方、動き、存在、全てに「野性的な」と前置きしてもいいくら
いの溢れ出るヤンチャっぷりが見て取れる。

「アイ、良治だぞ。」

天青が俺を指す。

「…良治…なのか？本当に良治なのか？」

「そ、そうだけど…。」

「良治、会いたかった！！」

突然跳躍したアイはテーブルを飛び越えて俺に突撃してきた。

「うわっ！！な、なんだ！？おいっ！！」

「アイもな、お前が助けたサルなんだ。」

「そうそう、あれは良治が10才の頃だったかね、母さん？」

「あら9才の時ですよ。泣きながら、可哀相だ、って怪我をしたお猿さんをつれて帰ってきて。」

「そうか、9才か。あの時は大変だったなあ。」

「お前、色々と助けすぎだろ。」

天青が笑う。

アイをなんとか引き剥がし、天青を睨む。

「ほっとけ…。」

「ま、そうゆうの好きだぜ、俺は。」

「うるせえよ。」

「で、だ。2人とも俺のところで見習をする予定だったんだが。ま、俺も色々と忙しくてな。暫く預かってくれな。」

「ちよつと、勝手に決めるな」

「そりやもう、神様をお願いされたとあつては断れないですな。いいな、良治！しっかり面倒見るんだぞ！」

母さんも、ウンウンと頷く。

両親の中ではもう決定事項になっているようだ。

…コレも術でどうにかしてるんじゃないやねえだろうな？

「さて、そんじゃ俺はこれで失礼するぜ。」

「ちよつ！元にもど」

「そのうち何とかしてやるよ。んじゃない！」

天青は爽やかな笑みを残してポワンと消えた。

そのうち…ね。

その前に、だ。

よほど気に入ったのか、まだから揚げを食べ続けているヒバリ。

目が合うと照れくさそうに頬を染めるサウ。

何故か俺の左腕にぶら下がっているアイ。

娘が出来たみたいだ、とはしゃぐ両親。

なんか問題を押し付けられただけのような気がするのだが…。

惚れ薬で買収されたのは、ちょっと早まったかな？

4・新たな災難？（後書き）

勢いでキャラが増えました。

後悔してないし、反省もしてない（笑）

ノンビリ更新ですが見捨てないでね（^^;）

5・もう一騒動

ヒバリ

自分で「バカンス」と言ったのは上手い言い方だと思った。

あのいい加減男の面倒を見なくても良いのだ。

最高じゃないですか！

知るほどに良治様の人柄も優しく、何とかやってゆけそうだし。

後から入ってきた2人ともなんとかなるだろう。

むしろ、後輩として色々とやってもらおうかな？

などと考えて、ヒバリはホクホクした笑顔を浮かべる。

でもね…本当は…。

そう、本当は何処かの山の主様の所にでも奉公に行きたかったのだ。

お庭の手入れ役や厨房でも構わない。

安定した職場で、静かに自分の仕事に専念し、昇進を目指す。

そしてゆくゆくはどこかの主様に見初められたら…なんて考えてた事もあったのだ。

それが今では、転勤、連戦、出張続きの動物霊の神様のお世話係り。

確かに爬虫類霊専門や九十九神専門よりはマシだといえる。

でもね、仕える相手が天青様でなければの話だったのだ。

スケジュールは守らない、遅刻間違え当たり前。

仕事も適当で、たまにサボって何処かで遊んでいるほうが多いくらいだ。

一度、某山の主様が怒鳴り込んできた事があった。

女房に手出しするなと言われ、何故か私が謝り倒したのだ。

もうああゆうのは勘弁して欲しい…。

本当にいい加減な神様。

でも、だからこそ、このバカンスを楽しまねば、と思う。

ああ、いつそ良治様が治らないですつとこのままなら最高なんだけどな…。

そんな腹黒い事を考えてたりする。

ヒバリなりの処世術なんですよ。

アイ

良治はいい！

良治はやっぱり、あつたかい。

さっきの抱きついた感触を思い出しニコニコとしてしまつ。

今までにあつた色々な事を全て忘れさせてくれた。

縄張り争いでとうちゃんが死んだ事も。

新しいボスにかあちゃんが追い出された事も。

自分が死んでしまった事も。

全部、そんな事もあつた、という気にさせてくれる。

そうだ、今だ。

今が大事だと思っている。

良治がいて、アイがいる。

それが純粹に嬉しかった。

それに友達も出来た。

まだ話はしてないけど、きっと友達になれる。

良治がいるなら、なんでもできる。

なんでも楽しい。

「アイちゃん、お風呂入りませんか？」

ヒバリが微笑みながら話し掛けてきた。

「お…ふろ？」

「あー、つまり体を綺麗にして」

「ああ、おんせんか？アイしってるぞ。」

「ちょっと…違うけど。ま、いいか。一緒に行こうよ。」

アイは大きく頷く。

ヒバリは良い奴だ。

親切で、大好きになったぞ。

「おんせんはお湯に入るんだぞ。」

「うん、お風呂も一緒に、服を脱いでお湯に入って、体を綺麗にするところで。ちよっ！！！！」

「ん？どうした？」

「まだ、服脱いじゃ」

「あっ！良治だ！！！！」

大好きな気持ちは止められない。

アイは上着を放り投げ、平坦な胸を晒しながら良治に突撃した。

サラ

落ち着いて、落ち着いて…。

大丈夫、落ち着けばきっと。

根拠の無い自信が虚しく感じられる。

さっきはちゃんと言えなかった。

良治様に助けて頂いた事。

そして、こうしてまたお会いできて嬉しかったと。

嗚呼、良治様の顔を、言葉を交わす事を、考えただけで倒れてしま
いそう…。

胸がドキドキしていた。

頬がカツと熱くなって、何も言えなくなってしまいそう。

それにしても。

久し振りに出会えた良治様の顔を思い出す。

やはり素敵な方です…。

子供の頃、あの腕にギュツとされた時から密かに思っていた。

見習として人の姿を与えられた所為でしょうか？

あの時よりも、もっと優しくて素敵な方だと感じられる。

胸がドキドキして壊れてしまいそうなくらい…。

落ち着いて、私。

そう念じる。

良治様のお母様に頼まれてお風呂場に服を持ってゆくだけ。

服を置いて、一声かければそれで良い。

もしも時間が許すのならば、さっき言えなかった言葉もお伝えしたい。

それで、お話しをする事ができるのならばこれ以上はもう…。

それ以上をチラツと考えて、また顔が火照ってくる。

ダメダメ！

ただ、着替えをお渡しするだけなんだから。

落ち着いて。

落ち着いて私…。

と、ドアノブに手を掛けようとしたところで、いきなりそれは開いた。

「母さん、着替えが」

「きゃっ！」

上半身裸の良治様に抱きとめられる形になってしまつた。
破裂したドキドキで、サラは一瞬でのぼせてしまった。

薫

さっきはちよつと言ひ過ぎたかな…。

大体、いきなり触りまくるなんて無しでしょ！

い、いや別に了解を取れば良いとか、そうゆうんじゃない！

ああ、その、つまり、少しは言い訳を聞いてあげないのも可哀相かなって。

なにやらおかしな事を言つてたような気もするし。

そう言えばあの娘誰だろう？

妹はいないし、親戚の子とかかなあ？

まあ、べ、別に誰でも良いけどさ…。

第一に今は別にあいつに会いに行くわけじゃないし！

おばさんがキンピラくれるって言うから行くだけで。

おばさんのキンピラ好きだから行くだけ！

もしもね、もしもたまたまあいつに会ったなら話の一つでも聞いてあげても良いかなとかは思ってるよ。

そんなのはオマケで、どーでも良いけどさ。

コスプレしようが、少女と戯れ様が別に私には関係ない…。

そっいえば何でコスプレしてたんだろう？！

アキバ系とかソッチが趣味とか？！

あーやだやだ…。

って何考えてるんだろう、私。

はあ…。

もう、サツと行ってキンピラ貰って、そのまま帰っちゃえば良いんだ。

言いたい事あるなら、そのうちあっちから言ってくるでしょ。

うん、そうだ。

さて、勝手知ったる馴染みの家だ。

とっとと用を済ませよう。

良治

それにしても。

今日は次から次から色々な事が…。

「はあああ…。」

ドツと深い溜め息が出てしまう。

耳とシッポは変わらず存在感を示すようにプルプルしている。

ヒバリだけでなく、サラとアイの面倒も見なければならぬ羽目に。

どうして次から次へと…。

…でも。

と思い直す。

その報酬で惚れ薬、つてのは結構オイシイかもしれん！

薫に使って効果が現われれば、「良治好きスキッ！！」なぐんておいしい事も。

うん、在り得るわけだ。ぐふふ…。

うひゃゝたまんねえゝ！！！！

どうするよ！おい！？

もしかしたら、とか な事まで…。

あゝヤバ、想像しただけで鼻血出そう…。

つてか、出てもーた…。

いかん、いかん。

バカな妄想はいい加減にして、どうやって薫に惚れ薬を飲ませるかを考えねば。

つと、着替え持ってくるの忘れてるし。

バスタオルを腰に巻いてドアを開ける。

「母さん、着替えが」

「きゃっ！」

勢いよく何かとぶつかった。

慌ててみるとサラが真っ赤な顔をして立っている。

と、次の瞬間サラがカクンと崩れ落ちた。

「わーたっ たたた！」

咄嗟に両腕で抱えるが、予想外な重さで一緒になって崩れ落ちてしまふ。

と、そこに突撃してくる赤い弾丸が。

「りょーじー！ー！ー！」

「あらら、アイちゃん？！…って、サラちゃんどうしたんですか？
？！ー！」

半裸で背中に抱きつくアイ。

押し倒されたサラを見てビックリしているヒバリ。

鼻血を出しながら、バスタオル一丁でサラを押し倒している良治。

そこへ、お約束のようにキンピラを持って台所から出て来た薫。

「…な…なに…。」

「か、薫!？」

気まずい沈黙の後。

ハラリ…。

運悪くも、腰に巻いていたバスタオルが落ちてしまった。

そりゃもう、モロ見え。

「良治のバカアアアア!!!!!」

バチイン!!

強烈な一撃を残して薫は走り去ってしまう。

混乱してるヒバリと、はしゃぐアイ、グッタリしたままのサラ。

自失呆然と涙を流す良治。

…もうダメだ…。

マジで、立ち直れない…。

あつ、とヒバリが声をあげる。

なんだよ、慰めの言葉でも言っのか？

「そついえば今日2回目の修羅場ですよ、良治様! 凄いですね。」

…コイツいつか殺す…。

5・もう一騒動（後書き）

微妙に微エロ方向に行ってるような（^^;）

まあ、良治は変態ってことで話は進めようと思ってますが（笑）

ちなみに物語内ではここまでで4時間くらいしか時間が経過してません。どれだけ長い話になるんだ、こりゃ…。

ま、ノンビリ、ダラダラ連載ですが、引き続きよろしくです。

6・学校へ行こう

ピピピピピ…。

けたたましい目覚ましの音に仕方なく目を開ける。

やわらかな朝の光の中、ボーッとしたまま部屋を眺めた。

ベッド脇にひいてある布団は乱れたままその主を失ったままだ。

そして元々片付いていない部屋が、よりいっそう乱雑さを増している。

そーいえば、なんか…昨日色々あったような…。

なんかこう…思い出したくないような事が…。

と、体を感じる妙な感触に視線を自分に戻す。

右横に女の子、胸元にキツネ、左腕にはサルがしがみついている。

「おわっ！」

一瞬、何事かと慌てて飛び起きる。

キツネはコロコロと部屋を転がっていった。

「あふ…おはようございます…。」

右横に潜り込んでいた女の子、ヒバリは大あくびをしながら目を擦っている。

左腕のアイは何事も無かったように、しがみついたまま寝息を立てる。

…ああ、そうだ…。

昨日から神様のとこの下っ端3人が同居する事になったんだ。うう…思い出したくもなかったのに。

それで物置部屋が片付いてなくて、居候どもが俺の部屋に転がり込んできてたんだった。

部屋が狭いので、3人で2つの布団つてのは可哀相だったかと思ったりもしたが。

つつうか、布団ひいてやったのに何で俺のベットに入り込んでるんだよ。

「いやゝ、ベッドって寝やすくて良いですねゝ。」

貴重なご感想ありがとう、ヒバリ。

キツネがクルンと宙返りを見ると、ポンと人の姿になる。

「お、おはようございますっ、良治様。」

顔を赤くしたサラが深々と頭を下げ挨拶する。

うんうん、礼儀正しい子だ。

で、何で顔が赤いんだ？

「あつ、あの、私朝食のお手伝いをします…。」

パタパタと急ぎ足で走り去ってしまう。

それを見ていたヒバリがニヤリと笑う。

「良治様、何やらかしたんですか？」

「するか！あほ。」

「薫様に振られて欲求不満とか？」

「…。」

こいつ絞め殺したるか…。

普通の女の子ならともかく、寝たりして気が抜けると動物に戻って

しまう女の子に対して何をしろと言っんだ。
しかも幼女に！

修行をすればヒバリのように人の姿のままでいられるらしいのだが、最近見習いになったばかりのサラとアイには難しいようだ。
なんだか、神様の世話係見習いつてのも色々あるんだな。

「ん？…あれ？」

「どうしました？」

「いや、着替えたいんだがアイが俺の腕を放してくれなくて…。」
「どれどれ。」

いつまでもぶら下がっているアイの小さな手を引き剥がそうとしているのだが、強烈な握力でなかなかその手が離れてくれない。
ヒバリも手を貸してくれてはいるのだがこれがなかなか…。
と、突然腕を握る力が強くなる。

「いたたっ！アイ結構力あるぞ。」

「そういえば、サルだかチンパンジーだかは握力が200キロくらいあるとか…。」

「腕が千切れるわい！」

「大変！アイちゃん！目をさまして！」

「あだだだっ！！折れるっつ！！！！早くなんとか…。」

「アイちゃん！アイちゃん！！！」

「んぎゃ〜！！！！おれ…る…！！！！！」

「ゴメン…良治…」

俺とヒバリに怒られたアイはシユンとなっている。
ま、でも悪気があってしたわけじゃないしな。

「あ…まあ、次は寝ぼけないように。」

頭をクシクシと撫でてやると、ニパツと笑う。
なんか犬みたいで可愛いぞ。
サルだけどな。

「良治様、そろそろお時間では…。」

遠慮がちにサラが言う。

この子はどうも遠慮がち、というか怖がってるように見える。
まあ、昨日半裸で抱きついてしまった前科もあるしな…。
もうちょつと優しく対応してあげなきゃならないかな？
出来るだけ笑顔を作りながら答える。

「ありがとう、サラ。」

「そ、そそ…そんな、とんでもないです。」

あー、こりゃゆっくり慣れてもらうしかないのかな…。

「さ、良治様。とつとと学校行きますよ。」

と、ヒバリ。

コイツは慣れすぎだ。

ヒバリは2人に先輩っぽく言い聞かせる。

「じゃ、私達が学校へ行っている間、お母様の言う事をよく聞いて大人しくしてくださいね。」

「そうそう、俺達が…って！！何でヒバリまで学校に行こうとしてるんだよ！！」

「ヒバリちゃん！お母様、だなんて水臭い。本当のお母さんだと思っても良いのよ。」

「ああ、もう！混乱するから母さんは黙ってて！」

母さんは涙目で何やら訴えているが、ほっておく事にした。

「でも私、良治様のお世話をしないと…。」

「お世話ならアイもしたいぞ！！」

「あつ、わ、わ、私も…。」

「世話なんかいらねえ！！第一にみんなは生徒じゃないから学校に行けないって。」

「んじゃ、変化して行けば」

「どこの世界に学校に動物連れて登校する奴がいるんだよ。」

「でも…。」

「でもない！世話なんか必要ないから。」

ヒバリが俺の頭の上を指差す。

「でも、耳とシツポが。」

「…。」

…。

わすれてたああ！！！！

朝からドタバタしてたからすっかり忘れてた。

よく考えたらこんな格好で学校いけないじゃん！

「ヒバリ、昨日の術みたいにみんなに納得してもらえないのか？」

「いや…私達の力じゃまだそこまでは。」

「誤魔化せないんじゃないじゃ休むしか…。」

するとヒバリがポンと手を叩く。

「良治様、私に良い案が。」

いや、そのニヤツと笑うの怖いんだけど…。

仕方ない、聞くだけ聞いてやるか。

「オッス！良治。」

肩をポンと叩いたのは沢井遊^{さわいゆう}。

良く言っても、悪く言っても悪友としか言いようがない奴だ。

「ん、おはよう。」

「ちよつと、聞いてくれよ。さっきさ、電車が揺れた時に女の子に抱き付かれちゃってさ。それがメチャメチャ可愛いんだよ！！これってロマンの始まりじゃね？トキメキメモリアルって感じじゃね？」

青春ストライクで、俺始まったんじゃない？どうよ？どうよ？」

「…。」

「なんだよ、つめてえなあ。このっ、このおっ。」

とか俺のわき腹をグリグリしてくる。

ま、こんな感じで頭が腐ってる奴だ。

まともに相手してたら俺の精神状態まで疑われてしまいそうだ。

「良治様、バレてないですよ。作戦バツチリです。」

「…こいつはバカだ。参考にならん。」

ヒバリは小鳥の姿で俺の肩に止まっている。

コレも異常な姿だと思っただが、教室についても誰も突っ込まない。みんなが遊と同じくバカなのか、俺がアレだと思われているのか…。知りたいけど、怖くて知りたくもない…。

「おつと良治君、独り言ですか？それとも僕に言いたい事でもあるんですか？さあ君のその熱いパッションをぶつけたまえ！君のリビドーを迸らせたまえ！！」

とか言いながらポーズを決めている。

誰か、マジでこいつを何とかして下さい。

しっかし…。

クラスにほとんどの人間が入ってきているにも関わらず、誰にもバレてないみたいだ。

まさかこんな作戦が上手くゆくとは…。

ちなみに作戦というのは…。

・頭にニット帽かぶる。

・シッポはケツが膨らまないように股間に挟む。

・以上！

…いや、コレを作戦と呼んでいいのだろうか…。
なんか時間の問題のような気が…。

「…おはよう。」

その声にピクツと体が反応する。
遅れ気味に薫が登校してきたのだ。

「薫、その、おはよう。」

「…お、おはよう…。」

一瞬昨日の事が頭を過ぎり、気まずいムードが流れる。
半裸で幼女、しかも複数とジャレてた所を目撃されているからなあ…。

必死に言い訳を考えていると、バカの横槍が。

「あやあ、何ですかこの空気は。何やら怪しい匂いがしますよ。
青春しちゃったんですか？熱いパトスを进らせちゃったんですか？
アチチでパヤパヤですかあ？」

「…うるさい！！」

バキッ！

俺と薫の強烈な一撃を喰らって、遊は撃沈する。
そんな事よりも昨日の誤解を解かないと。

「薫！後で…その、話があるから。」

「っ！…う、うん。」

よっしゃあ！なんとかなるかも！
ちよっと希望の光が見えてきた。

あとは完璧に誤解を解いてだ、それから…。

「な、な、な、なに…？」

薫が俺を指差して、顔を赤くする。

ん？なんだ？

指されているのは俺の股間の辺りだ。

見ると喜んだ尻尾がワサワサ動いている。

見た目には股間がモリモリ動いていた。

「なっ！？！？」

「りよ…良治の変態いつつ…！！！！！」

バチーン！！！！

崩れ落ちながら思った。

うつ…やっぱりこうゆう運命なのか、俺？

昼休み、俺は屋上に避難していた。

もう、今までの事は思い出たくない…。

朝の事がすでに学校中の噂になっているのだ。

A子「ねえ、聞いた？相田君の話し。」

B子「知ってる知ってる！なんか凄いだって！」

C子「何？何？」

A子「3組の相田君のアソコが動いたんだって！」

B子「ズボンの上から分かるくらい！！」

A子「しかも、こうビクンビクンって！」

C子「ヤダー！それって…それって！！」

B子「それを朝からクラスの女子に見せつけたらしくて。」

C子「イヤー！！変態！！」

A子「しかもそのアソコが　　で　　みたいで、変な液が出て
しちゃったんだって！！」

C子「ヤダー！！あたし、もう男の子に触りたくない。」　　され
ちゃうー！」

ってそれ、せめて俺の聞こえない所で言ってくれよ…。
もう学校来れない…。

ってかやっぱ来るんじゃないかった。

クソ！青春の儚さに涙が止まりやしねえよ…。

さめざめとないていると、傍らでポンとヒバリが変化する。

「あら、また泣いているんですか？良治様。」

「何が良い案だ、この野郎！」

「ま、仕方ないじゃないですか。」

「仕方なくねえだろ！俺もう学校来ねえよ！」

「うーん、じゃあ仕方ないですね。もう少し良治様で遊んでみたか
つたんですが。」

「俺で遊ぶな！！」

「最後の手を使いましょう。」

「最後の手？」

「はい。日本人の好きなお涙頂戴モノでいきます。」

なんかまた、自身満々のヒバリに一抹の不安を覚えた。

俺はヒバリに説得されクラスに戻った。

ヒソヒソ声が背中に刺さる。

針のむしろだ…。

席についても誰も話し掛けようともしない。

というか、珍獣を見つめるように遠巻きの見物人が増殖していく。
クソ！早く来てくれヒバリ。

「話は聞かせてもらったぜ、良治。お前のアレがナニしちゃってるんだてな。うひゃひゃひゃひゃっ！」

ゴツッ。

唯一話し掛けてきた遊を右の裏拳で沈黙させる。

まったく、どいつもこいつも…。

「…良治。」

「えーん、えーん！」

入り口からヒバリを連れた薫が現われる。

ヒバリは大泣きしながら薫にてを引かれている。

「この子、良治の親戚の子なんだって？」

「えっ?! そ、それは…」

「お兄ちゃん!!!」

俺の台詞を遮るようにヒバリが飛びついてくる。

「私に合わせて演技してくださいよ。」

「あ、スマン…」

ヒソヒソ声で打ち合わせをしながら、なんとか演技に戻る。

「ど、どうしたんだ? 遠い親戚のヒバリちゃん。お、お兄ちゃんの学校に来ちゃダメだって言っただろう。」

「だってヒバリ寂しかったんだもん!」

「ああ、ゴメン、ゴメン。お兄ちゃんが悪かったよ。」

「良治、この子…親戚の子だったんだ?」

「あ、ああ。母さんの伯父さんの娘の腹違いの弟の妹の…つまり遠い親戚で、つい最近両親を亡くしたからウチで預かる事になって。」

「そう、そうだったんだ。」

「うん、そうそう…いてっ。」

「台詞が棒読みすぎです!」

小さな声で怒りながらヒバリが俺のスネを蹴る。

俺にこんな演技力を求めるなよ。

「お兄ちゃん! ナデナデさせて。」

「ま、またかい? ししし、仕方ないなあ。」

俺はしゃがむとニットを取る。
とチヨコンと耳が現われる。

「うふふ、カルディナだあ。」

「まったく、ヒバリはウチの愛犬だったカルディナが好きだなあ。」

「良治その耳って？」

「カルディナが死んじゃって寂しかったからお兄ちゃんにカルディナになってもらったの。」

「まったくまいったよ。シツポまで付けられちゃってさ。ヒバリちゃんも本当にカルディナが好きだったからなあ。」

ズボンをずらすとシツポがチョロンと出てくる。

ヒバリはそれもナデナデしてくれる。

「でもねヒバリちゃん。このシツポの所為でお兄ちゃん困ってるんだ。」

「どうしたの？」

「お兄ちゃん変態さんと間違えられちゃって…。」

「私も良治がコスプレにでも走ったのかと。」

器用にもヒバリは涙を溢れる寸前で止めながら、立ち上がり大きな声で訴える。

「みんな酷いよ。お兄ちゃんはヒバリが寂しくない為に一生懸命やってくれたのに。お兄ちゃんは変態じゃないもん！とっても優しいだけなんだもん！！」

「…。」

ヒバリの迫真の演技に皆はシュンとなる。

なるほど、これがお涙頂戴作戦か。

すると薫が近づきヒバリを撫でてやる。

「ゴメンねヒバリちゃん。私、良治の事誤解してたね。ヒバリちゃんの為に頑張ってただけだったんだね。」

「お姉ちゃん…。」

よっしゃ。いい具合に薫の誤解が解けてる。

このままクラスメートも巻き込めれば…。

と突然、遊が俺に抱きついてくる。

「良治よ！お前を真性の変態だと思ってしまった俺を許してくれ！前々から怪しいと思ってて、素直に納得してしまった俺の心が汚れていたよ…！」

いや、抱きついて泣くこたあねえだろ。

つか、お前俺をそんな風に思ってたのかよ…。

うわあ、鼻水汚いつての！

「みんな、良治はヒバリちゃんの為にコスプレしてたんだ。皆も誤解を解いて良治のコスプレを応援してやろうぜ！ヒバリちゃんの為にさ！」

「おおー！！！」

遊の一言に妙な団結が生まれる。

コスプレ応援してもらっても嬉しくないのだが…。

ガラガラ。

開かれた扉の向こうには涙を流しながら立っている校長先生が何故かいた。

「話は聞かせてもらいました。健気な少女の為に友達に笑われてもコスプレし続けるその勇氣。そしてそれを守ろうとする皆の思いやり。私は感動の涙を止める事が出来ません！今回の件は校則違反に

はしません。さあ、相田君。どんどんコスプレして下さい!」

「さすが校長話分かる!みんな聞いたか!これで良治は学校公認のコスプレイヤーだ!俺達も頑張って応援してやろうぜ!」

「おおーっ!」

クラス全員がこぶしを突き上げ叫んだ。

何だ?この団結は?

ま、まあこの姿を何とか誤魔化せたから良いのだけど…。
なんか嬉しくないなあ。

…。

つか、俺、学校公認のコスプレ犬男ですか…。

嗚呼、普通の生活がドンドン遠のいてゆくような。

ヒバリはコッソリとブイサインをしている。

そのヒバリを、良かったね、と言いながら薫が撫でていた。

ま、コイツのおかげで薫と仲直り出来たし。

悪くないかな、こうゆうの。

6・学校へ行こう（後書き）

ご無沙汰です。

今回は良治君が学校で変態です。

まあ、彼の不幸は今に始まった事じゃないですから。

にしても、自分で書いておいてなんですが、良治とヒバリは結構良いコンビだなあ、と。

会話がポンポン出てきて大変楽です（笑）

ただ個人的にはサラが気に入っているの、掘り下げて書いてみた
いなあ、とか思ってます。

ま、ストーリー的には始まったばかりなので、追々ゆっくりと書いて
みたいですね。

次回までまた少し間が空くと思いますが。

見捨てないでね（^^;）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9604b/>

いぬたま

2010年11月30日03時47分発行